

I 時代を超えた塔のまち・大阪

日本における本格的な仏教寺院としては最古のものとされる四天王寺は、593年造立開始とされる。当時、上町台地は河内湾に南から突き出た半島で、その上に四天王寺の五重塔が、難波津のランドマークとなっていた。

その後、安土桃山時代には上町台地の北端に羽柴秀吉が石山本願寺跡地に大阪城の築城を開始する。秀吉の死後、1614年の大阪冬の陣、1615年の大阪夏の陣により、大坂城は落城した。江戸時代に入ると、幕府直轄領に編入されたのを期に、1620年から大坂城の再建は始まった。

そして、昭和に入ると当時の大阪市長関一により再建が提唱され、市民の寄付金により1931年に大阪城復興天守（設計：古川重春）が竣工した。

古代より大阪のランドマークといえ、塔であった。港町としての視認性や、水辺に突き出した上町台地の見晴らしの良さも手伝って、四天王寺五重塔、大阪城ともに、都市の顔であった。

こうした大阪の顔としての塔をつくる動きは、近代に入ってから受け継がれる。明治時代、1903年には、大阪で第5回国勧業博覧会が新世界で開催された。初めて海外からの出品がされ、将来の万国博覧会を意識したものであった。その会場跡地に1912年に遊園地、ルナパークとともに建設されたのが、初代通天閣（設計：設楽貞雄）であった。当時は東洋一の高さを誇った、近代大阪を象徴する塔の誕生であった。太平洋戦争の影響により1943年には初代は解体されるが、戦後の1956年には民間により再建されている。新しい[通天閣](#)の設計は東京タワー、名古屋テレビ塔などを手がけた内藤多仲であった。塔の側面に設置された日立のネオンは当時から名物となり、道頓堀のグリコネオンとともに大阪の夜景をいまでも彩っている。

こうした大阪の顔としての塔は、現在はその役割の多くを超高層建築物が担っている。1993年に建設された[梅田スカイビル](#)（設計：原広司）は、立地による視認性の高さや、2棟のタワーとその頂部にある空中庭園展望台という独特の形状によって、大阪のランドマークとしての役割とともに、世界を代表する建築物のひとつとして、その評価も高い。2014年には四天王寺五重塔の南側に地上60階、高さ300mの日本で最も高い超高層ビルであるあべのハルカス（設計：シーザー・ペリ、竹中工務店）も竣工し、大阪の顔としての塔はその厚みを増している。（[嘉名光市](#)）

關守天園公城阪大るせ建再で力の民市 (所名阪大)
Osakajo Park and Castle Tower reconstructed by Citizen.
(Famous Place in Osaka)

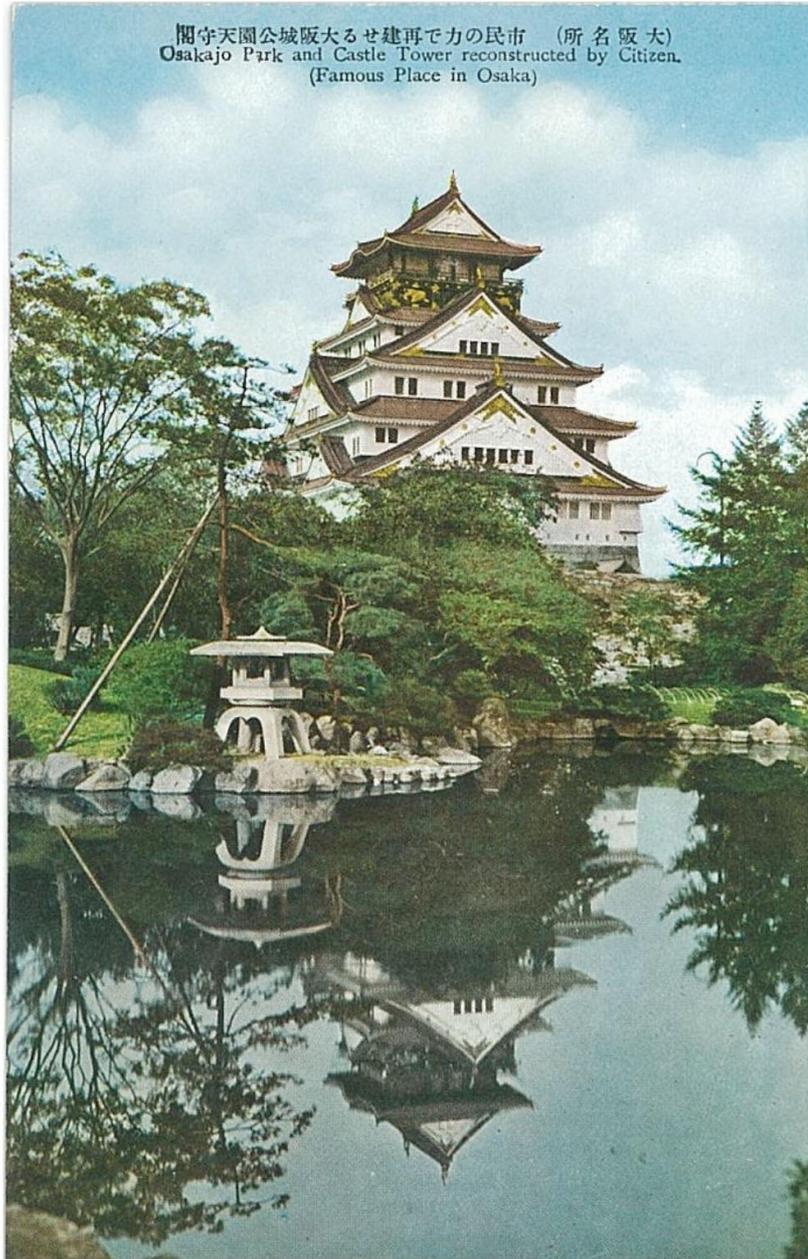


写真 大阪城 (出所 VIEWS OF OSAKA 大大阪)